10　日本からの移住

コーヒー農園で働く日系人とその家族（1930年代）

1908年、第1回移民船「笠戸丸」が神戸港を出港し、日本人のブラジルへの本格的な移住が始まりました。

当時、ブラジルでは農業労働者が不足しており、他方で日本の農村は貧しく、日本政府は海外への移住を奨励しました。

日本からの移住者の多くは、ブラジル最大の都市、サンパウロ市周辺のコーヒー農園や綿花畑で契約労働者として働きました。

移住前に「短期間で金を儲けて帰国する」予定だった日本人が直面した現実は厳しく、農業労働は非常に過酷なものでしたが、彼らは長年にわたってブラジルの農業に大きく貢献し、ブラジルでは非常に高い評価を得ています。

また、サンパウロ市にある日本人街 「Liberdade （リベルダーデ）」 を中心に、ブラジル社会に溶け込み、政界や経済界、法曹界で活躍する人も数多くいます。

1908～1972年までの日本人移民の総数は249,152人。現在、ブラジル日系人は約140万人で、その半数はサンパウロ州に住んでいます。

日本人街「リベルダーデ」の七夕祭り

日本人街で毎年行われる七夕祭

リベルダーデの七夕祭りは1979年から毎年7月に行われています。日系人の他、日本の文化に興味あるブラジル人が集まり、ステージで行われる和太鼓などの演奏を見たり、短冊に願いを書いたり、屋台で日本料理を食べたりします。

ミス七夕

日系人を中心とした住民による和太鼓演奏